

【論 文】

臨床心理学的視点を生かした子育て支援（2）

—私立幼稚園における園内研修の実践より—

稲月 聡子（岡山大学学術研究院社会文化科学学域）

本稿では、私立幼稚園における保育心理臨床業務の一つとして行った園内研修の実践について、その概要とアンケート結果を報告する。園内研修の対象者は幼稚園教諭 8 名で、新版 K 式発達検査の概要と、園児の発達検査の結果を共有する形で行った。アンケートでは、＜発達検査の理解の深まり＞＜子ども理解の深まり＞＜今後の研修の在り方＞の 3 つの大カテゴリーが抽出され、検査を理解することで、結果を通した子ども理解が深まること、クラス担任それぞれが検査結果を通して子ども理解を深めるのみならず、園全体で検査結果を子ども理解に役立てる視点が重要であることが示された。

キーワード：保育心理臨床、園内研修、発達検査

1. はじめに

乳幼児期における保育・教育の質の重要性が広く認識されるに伴い、その質の確保と向上のために実施される研修のあり方が問われている。文部科学省で行われた「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」では、具体的方策のひとつとして、研修の充実等による資質の向上が挙げられた（文部科学省，2020）。厚生労働省でも、2018年から2020年に「保育所等における保育の質・向上に関する検討会」が行われ、子ども中心の保育の実践に向けた検討を経て、今後求められることとして、多様な関係者（保護者・地域住民・他園の職員・専門家など）が関与・参画する、開かれた評価・研修があげられている（厚生労働省，2020）。このような動きに伴い、研修のポイントやあると便利な備品、具体的な研修内容といった手引き（三谷，2020）や、それぞれの目標設定のもと行われた様々な研修事例の報告（鈴木，2023）など、より充実した園内研修のあり方が検討されている。

本稿では、筆者が発達相談員として勤務している私立幼稚園で行った、発達検査の結果を用いた園内研修について報告する。OECD（2018）の調査においても、調査参加国全体として、「特

別な支援を要する子供の保育」に対して、専門性向上のニーズが大きいことが明らかにされている（国立教育政策研究所，2020）。検査結果を園での支援に活かす視点を育てることは、心理職が保育心理臨床で貢献していく一つの形として検討の意義がある。今回実施した園内研修について改めて振り返り、今後の充実につなげたい。

2. 職員研修の概要

1) 研修内容の選定

筆者が勤務している幼稚園は、特別な支援を要する子どもについては、病院や相談機関で知能検査や発達検査を受検してもらい、各専門家から得た助言をもとに、各担任が園でできる関わりの工夫を検討し、支援に役立てている。また、稲月（2022）でも報告した通り、発達相談員である筆者と各担任との保育カンファレンスで、検査からわかる特徴を共有したり、変化を確認したりして検査結果を活用することもある。ただし、先生たちは学生時代あるいは現場で、発達検査自体については学ぶ機会がないまま支援に役立てなければならない現状があった。そのため、保育心理職の資格をもち、従来職員研修

を担当しているA先生から、発達検査の概要を理解し、今後の園児の支援やクラス運営などに役立てられる研修をしたいと相談があり、A先生と協働して職員研修を行うことにした。

研修内容については、A先生と協議し、①新版K式検査の概要と結果の見方についての説明、②事例に即した支援を考える、③地域の各種相談機関についての情報共有、の三部構成とし、①と②を筆者が、③をA先生が担当した。今回新版K式発達検査をとりあげたのは、保護者の同意を得て園に共有される検査結果報告書で、最も多く報告される検査であることによる。

2) 研修会の様子

参加者はクラス担任6名と主任2名計8名で、年齢や勤務年数などの基本属性は様々であった。研修会は1時間半で構成し、最後に研修会に関するアンケートの回答をお願いした。

研修会はまず、文献に基づき、新版K式発達検査の①領域について、②縦の関連と横の関連について、③検査でわかること、を資料を用いて説明した（新版K式発達検査研究会、2008；大島、2013）。その後、園で共有している実際の園児の結果を用いた事例検討を行った。なお、検査の信頼性・妥当性を保持するため、検査用紙そのものを研修で用いることは避け、必要な情報だけを記載する形で筆者が作成した模擬の検査用紙を用いることとした。また検査の適切な利用に関する注意については、研修時にも口頭で伝え、注意を促した。まず、先生たちには、プロフィールの引き方を文献に基づいて示し、名前を伏せた形で、ある園児の検査結果について、各自にプロフィールを引いてもらった。そして名前を伏せた形のまま、検査結果からわかる強みと難しさを挙げてもらった。その後、どの子の結果であったかを紹介し、現在のクラス担任に、クラスでの様子や関わりの上で困っていることなどを話してもらった。

最後に、A先生から園児が住む自治体に設置されている発達相談の窓口を紹介してもらった。

3) アンケートの結果

アンケートは研修のわかりやすさと有用性を五件法で、①もっとも有益だった部分、②よりよくするには、③今後取り上げてほしいことに

ついて自由記述で回答を求めた。本稿では、自由記述による回答を分析の対象とした。分析手続きとして、自由記述の内容を切片化し、意味の似たものを集めて小カテゴリー、さらに大カテゴリーを作成した（表1）。大カテゴリーとしては＜発達検査に関する理解の深まり＞、＜子ども理解の深まり＞、＜今後の研修の在り方＞の3つが得られた。以下、大カテゴリーごとに回答内容をまとめた。

表1 研修会アンケートの自由記述の結果

大カテゴリー	小カテゴリー
発達検査に関する理解の深まり (16)	曖昧だった理解の明確化 (8)
	視覚的なわかりやすさ (5)
	事例による理解の深まり (2)
	主体的な関与 (1)
子ども理解の深まり (5)	実際の子どもの様子とのすりあわせ (3)
	園全体での子ども理解の共有 (2)
今後の研修の在り方 (15)	具体的な支援方法 (7)
	事例の活用 (5)
	グループで考える (3)

(1) 発達検査に関する理解の深まり

まず、最も多く得られた回答は、「何となくの理解が明確になった」「これまで検査の見方がよくわからなかった」などの【曖昧だった理解の明確化】に関するものだった。また、「表にするとわかりやすい」「視覚的に凸凹をみれた」など、【視覚的なわかりやすさ】に関する回答も多く得られた。さらに、「事例があると、子どもをイメージしやすい」といった【事例による理解の深まり】、「実際にプロフィールを引くことで、考えながら取り組めた」といった【主体的な関与】といった小カテゴリーも抽出された。

(2) 子ども理解の深まり

本カテゴリーでは、「結果の見方がわかると、子どもの様子と照らし合わせて理解できる」「検査結果からみえる子どもイメージと実際の園児の像が一致していて面白かった」といった【実際の子どもの様子とのすりあわせ】についての回答と、「園全体で子どもをみる機会になる」といった【園全体での子ども理解の共有】に関する回答が得られた。

(3) 今後の研修の在り方

本カテゴリーのうち最も回答が多かったのは、「具体的な支援の方法を知りたい」「園でのサポートの色々な方法」といった【具体的な支援方法】に関するものだった。また、「事例をもとに

考えたい」「事例の話をたくさん聞きたい」といった【事例の活用】、「みんなで考える時間がほしい」「グループワークにしてみる」など、【グループで考える】方法についての回答も得られた。

3. 考察

アンケート結果の分析より、本研修では＜発達検査に関する理解の深まり＞、＜子ども理解の深まり＞がなされたことが示された。また本研修をふまえた＜今後の研修の在り方＞として、クラスで活かす具体的な支援方法の検討、事例やグループワークの活用といった要望があることがわかった。

今回のアンケート結果からは、検査そのものを理解することで、検査結果の理解も深まり、それが子ども理解の深まりにもつながることが示された。これについては、小学校教員の知能検査に関する職員研修でも同様の結果が示されており（土井・稲月，2023）、教育臨床での他職種連携の一つの在り方として、検査の結果の共有だけではなく、検査に関する知識伝達も併せて行う意義が示されたといえる。

また、今回小カテゴリーで抽出された【視覚的なわかりやすさ】も重要であると思われる。従来幼稚園に共有されている検査報告書は、発達年齢や発達指数などの数値と、検査結果からわかる特徴などが文章のみで整理されたものが多い。今回筆者は隈元（2023）の検査結果のフィードバックの方法を参考にして、視覚的に子どもの特徴を捉えられるよう、プロフィールを描ける模擬の検査用紙を用いた。今後も共有される報告書は数値や文章のみの記載であったとしても、必要に応じてプロフィールをイメージしながら、子ども理解に役立てていくことが可能となったことは、検査結果を日常的な支援につなげるうえで重要なステップだといえる。

さらに本研修では、実際にプロフィールを各自に引いてもらう時間を設け、筆者が会場を巡回して個別に理解を確認し、コメントをする形をとった。中坪（2019）は、園内研修には大別すると「伝達型」園内研修と「協働型」園内研修の二つの形があり、「伝達型」園内研修は、一方的に知識や技術を伝えるトップダウンモデルで、「協働型」園内研修は、個々の保育者が相

互に語り合い、専門家として育ちあいながら、園という組織がチームワークを形成する場として機能するものだとしている。本研修の構成①と③は知識伝達を行う「伝達型」研修であったが、②で「協働型」研修を取り入れたことで、一方的に説明を聞くだけの受動的な研修にならず、【主体的関与】や【園全体での子ども理解の共有】が抽出される主体的かつ全体的な研修となったように思われる。

次に＜今後の研修の在り方＞について考えたい。今回最も多かったのは、【具体的な支援方法】に関する回答だった。また、【グループで考える】提案も複数あった。

今回時間の制約もあり、具体的な支援方法の創出までには至らず、グループワークの時間を設けることもできなかった。今後は具体的な支援方法に焦点をあてた、グループワークを取り入れた研修内容を検討する必要がある。

また、具体的な支援方法のニーズの高さは、小学校教員の職員研修と同様の結果であり（同上）、子どもの困難をいかに理解するか重要視する心理職の専門性と、目の前の子どもに実際にどう指導・支援していくのかを重要視する幼稚園教諭の専門性の、職種間の違いが明示されているといえる。なお当園では、スケジュールはホワイトボードで全体に示す、低学年では指示は一つずつ行うなど、視覚的手がかりや簡潔な指示といった多くの園児に有効な手立ては既に活用されているため、本結果は園児それぞれに応じたよりよい支援を行いたいという参加者の想いが表れたものだともいえる。これに応じる形としては、TEM（複線径路・等至性モデリング）を子ども理解に役立てる（中坪，2019）形や、機能的アセスメントを行動支援計画に役立てる（田原・岡村，2023）方法など、職員それぞれが子ども理解や支援計画に役立てられる知識の伝達が考えられる。一方で、今回の要望として【事例の活用】【グループで考える】が挙げられたことを考えると、園児の対応においてうまくいった関わりなどを集約し、園全体で事例集などを作成していく形もあるだろう。今後も園のニーズに合わせて、保育・教育の質の向上に貢献できる研修を検討する必要がある。

最後に、園内研修における学びに着目し、本研修について検討してみたい。箕輪（2023）は、

園内研修の意義を、保育者自身が保育における見方・認識を再構築すること、園全体でコミュニケーションを図り、知を共有する過程で保育者が共に育ち合うことにある、とまとめている。さらに、保育者が園内研修で学んだことを質的に検討し、①（知識や視点を）知る・得る、②（研修を自分の保育と結びつけ、自分なりに）考える・気づく、③（研修で得た学びから、課題や今後してみたいことを）見つける、の3つのカテゴリーを示している。

本研修のアンケート結果を上記のカテゴリーに照らし合わせて検討してみると、＜発達検査に関する理解の深まり＞は①に該当し、＜子ども理解の深まり＞は①および②に該当すると思われるのに対して、③については言及がみられなかった。そのため、＜今後の研修の在り方＞で挙げられた【具体的支援の方法】が、講師であった筆者に対する要望に終わるのではなく、参加者自身の課題やこれからの問題意識に結びつけていけるような研修内容の工夫が必要だろう。

4. おわりに

本稿では、筆者と幼稚園教諭とで実施した私立幼稚園での園内研修の実践について報告した。また、実施後のアンケート結果から、その意義と今後の方向性について検討した。

アンケートには「初めてだったのに、みんなで取り組むことが楽しくできた」といった回答もみられ、筆者にとっても学びの多い貴重な機会となった。互いに学び合う時間となるよう、引き続き検討していきたい。

【付記】子どもと同じ目線からその子の世界を理解しようと努めつつ、卒園以降の人生も含めた、長期的視点からの関わりを考える同志でいてくださる先生がたに、この場を借りて日頃の感謝の気持ちをお伝えできればと思います。

また、今年度ご退官される塚本千秋先生からは、臨床の本質を多く学ばせていただきました。カンファレンスでの、あたたかく率直で、やさしさにあふれたお言葉や態度にふれ、自分の視野が狭くなっていたり、頑なになっていたりとすることに気づかせていただくことも多かったです。また、ケースの相談をさせていただいた時

には、あたたかい言葉をかけていただき、“ああ、支えてもらって、こういうことなんだな。これが臨床なんだな”と、改めて腑に落ちるような体験をさせていただきました。今後も引き続きのご指導をお願いするとともに、ご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。

【文献】

文部科学省（2020）． 幼児教育の質の向上について（中間報告）（概要）．

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shoutou/140/mezt_00385.html（アクセス年月日 2023 年 12 月 27 日）

土井裕貴・稲月聡子（2023）． スクールカウンセラーによる小学校教員への WISC-IV の研修効果の質的検討－特別な教育的支援にどのように活かせるか－． 日本心理臨床学会第 42 回大会発表論文集， 241.

稲月聡子（2022）． 臨床心理学的視点を生かした子育て支援－私立幼稚園における発達相談の実践より－． 岡山大学臨床心理学論集（岡山大学大学院社会文化科学研究科・心理相談室紀要）， 20， 31 - 36.

厚生労働省（2020）． 保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会．

https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-kodomo_554839.html（アクセス年月日 2023 年 12 月 27 日）

国立教育政策研究所（2019）． OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書－質の高い幼児教育・保育に向けて－結果のポイント．

https://www.nier.go.jp/youji_kyouiku_kenyuu_center/oecd.html. （アクセス年月日 2023 年 12 月 25 日）

隈元みちる（編著）（2023）． 心理アセスメントを生活につなげる協働的フィードバック－ウェクスラー式知能検査を用いた手引き－． 岡山大学出版会．

三谷大紀（2020）． 楽しく継続できる園内研修の手引き． 大豆生田啓友（編著）． 「語り合い」で保育が変わる－子ども主体の保育をデザインする研修事例集－， 学研プラス， 11－24.

中坪史典（2019）． 「協働型」園内研修が拓く保

育者の専門性発達と園組織の活性化, 幼児教育じほう 47 (3), 5-11.

大島剛・川畑隆・伏見真理子・笹川宏樹・梁川恵・衣斐哲臣・菅野道英・宮井研治・大谷多加志・井口絹世・長嶋宏美 (2013). 発達相談と新版 K 式発達検査ー子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫. 明石書店.

新版 K 式発達検査研究会編 (2008). 新版 K 式発達検査法 2001 年版ー標準化資料と実施法ー. ナカニシヤ出版.

鈴木正敏 (2023). 楽しく・おもしろくする園内研修の工夫. 秋田喜代美・小田豊 (編著). 学びが広がる・深まる園内研修でもっと豊かな園づくり. 中央法規出版, 130 - 171.

田原有希・岡村章司 (2023). 幼稚園における学級全体への支援を促す機能的アセスメント研修ーフォローアップを含めて効果検討ー. LD 研究, 32 (3), 204-215.